



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 夜驚を訴えるエリート後継者

**主訴：**最近不安な夢ばかり見る。夢で覚醒して、その後なかなか寝つかれない。覚醒した時にはパジャマが胸元からびっしょりぬれるほどの寝汗をかいている。妻には、寝ているとき寝言が多く、時折叫んだりしていると言われる。 10

**来談者：**38歳の男性。妻と子ども1人（6歳の女兒）の3人家族。地域密着型公共事業に製品を提供している従業員600人のメーカーの取締役兼生産管理部長。 15

**会社の状況：**来談者の祖父が戦前に事業を興し、戦前・戦中を通じて地方自治体、軍隊、公共事業体向けに製品を作ってきた。製品は技術革新の余地がほとんどないものであり、一定の期間が経つと寿命が来るために交換しなければならない性質を持っている。公共事業体や自治体からの定期的な需要があるため、また競合他社がないため経営は安定している。祖父はもともとエンジニアでその技術を活かして会社を設立。豊富な官需を背景に、既に戦前にはその県の需要をほとんどカバーする企業体に成長させていた。戦後、駐留軍の指導があり、会社が2つに分割され県北部を長男が、県南部を祖父の内縁の妻の子ども（来談者の父親）が引き継ぐことになった。前者が「本家」、後者が「分家」のような位置関係にある。会社が分割されたとき、地元の公共事業体と銀行の資本が入り、株式の保有率はこの会社の一族が50%、公共事業体が25%、銀行が25%となっている。公共事業体と銀行から「天下り」で、常に10人ほどの役員や部長が送り込まれている。 20 25

**父親：**戦後の混乱期に祖父の会社を継いだこと、「本家」とライバル関係にあったこと、公共事業体や銀行との関係維持に腐心した経験からか、慎重で注意深く、かつ巧みな人心掌握の術を心得た経営者である。「一見温和で人当たりがよいが、心の中は冷徹な血がある」とのこと。 30

---

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの渡辺直登教授が作成した。ケースに記載されている個人情報については、本人および関係者の尊厳と秘密を保護するため、当事者の了解のもと事実から逸脱しない程度に偽装されている。